

佐藤 忠太郎

— 伝統の復活と発展をめざして —



佐藤 忠太郎 (佐藤家提供)

白石市の小さな工房で、「白石紙子」の作品が生み出されています。白石紙子とは、白石和紙を生かしたバッグ類や財布、小物入れ、名刺入れなどの工芸品です。白石市の特産品として知られ、各地から愛好者が作品を求めに訪れています。この工芸を起こしたのは、白石で生まれ育った佐藤忠太郎です。

忠太郎は、明治三十四（一九〇一）年、白石の呉服屋の長男として生まれました。小さなころから人と話をするのが好きだった忠太郎は、白石中学校（現在の白石高等学校）に入学し、同級生と夢を語り合いました。

「ぼくは、りっぱな彫刻家になりたいんだ。」

「ぼくは、東京に出て科学を学ぼうと思う。」

忠太郎は、友人たちとこのような話をするのが楽しくて仕方ありませんでした。自分も何か大きなことをやってみたいと、いつも思っていました。そんな志をもった忠太郎に突然、両親との別れがやってきました。スペイン風邪という病気のために、中学校卒業間近というときに両親を続けて失ってしまったのです。六人もの小さい弟や妹を抱えた忠太郎は、途方に暮れてしま



白石紙子の工芸品

ました。

中学校を卒業した忠太郎は、共に夢を語り合っていた同級生を駅まで見送りに行き、その帰り道に河原に腰を下ろしました。自分の夢をかなえるために東京に出て行く希望に満ちた友人の姿を思い浮かべた忠太郎は、雄大な蔵王山を見つめ、こぶしをにぎりしめたのでした。

（自分は、長男として呉服屋を継がなければならない。よし、どうせ地元に残るのなら、白石を発展させるような産業を起こしてやろうじゃないか。）

その後、忠太郎は、当時産業が大変盛んだった長野県に視察に行きました。そこで現地の人から聞いたのは「自分の足下を見つめ直しなさい。何か良い産業があるはずですよ。」という助言でした。

長野県から帰ってきた忠太郎は、ある日、仕事の仲間から聞いた話に、はっとしました。

「いやあ、大変だよ。紙布織りを手がけているばあさんたちが、みんな年でさあ。このままじゃ、白石紙布がなくなっちゃうなあ。」

白石紙布とは、白石和紙を使って特別な織り方をした紙の布で、この紙布で作った着物は、さらりとして肌ざわりがよく、軽くて大変上質なものでした。

「足下を見つめ直すとは、このことか……。」

忠太郎はその日から、さっそくお年寄りの家々を回り、実際の織り方を聞き、資料をもらい集めました。「白石和紙でない」と、この感触にはならないのだよねえ。」

白石紙子：
白石和紙の持つ
ばうしい手ざわり
と軽やかさを生か
した工芸品。現在
は、白石和紙製造
中止のため、ほか
の地域の上質な和
紙を使用している。

愛好者：
特定の物や活動が
好きで親しんだり
楽しんだりする人。

呉服屋：
和服用の織物など
を扱う店。

スペイン風邪：
一九一八年から
一九一九年にか
けて全世界で流
行したインフル
エンザ。日本で
は約三十九万人
が死亡したとい
われている。

途方に暮れる：
方法がなくてどう
しようもない様子。

視察：
その場所に行つて
実際の様子などを
見ること。

紙布織り：
白石和紙を細く裁
ち、こよりの糸に
し、その糸で織つ
た布。

「昔は、お殿様にも献上していたんですよ。」

と誇らしそうに話すお年寄りの話を聞かたびに、忠太郎の目は輝くのでした。

紙布織りに関する情報があると、全国各地どんなに遠くても調べに行ったり、初めて会う人にもどんなに偉い人にも、ためらうことなく尋ねたりする熱心な取組が実を結び、とうとう紙布織りの工程を記した報告書と一反の白石紙布を完成することができました。完成した一反を忠太郎は神棚に供え、うれしそうに手を合わせました。忠太郎が四十歳のときでした。

それから、忠太郎は小さな工場を建て、昔ながらの工程で白石紙布を作ることに専念しました。しばらくは順調に作っていましたが、戦後の大きな社会の変化を迎え、紙布の需要はだんだんと少なくなってきました。

もっと安く簡単に作ることができる布が使われるようになったからです。

昔の人々が作り上げてきた尊い白石の伝統を守り育てようとした忠太郎でしたが、新しい時代の流れに逆らうことはできず、紙布工場を閉めることになってしまいました。

しばらく何もする気になれなかった忠太郎は、久しぶりに蔵王山が見える河原に腰を下ろし、大きなため息をつきました。下を向いた忠太郎の目うつったのは、雪どけの水を含んだ、清らかなどどまることのない白石川の流れと、そこに咲いていた名前も分からない小さな小さな花でした。

それからの忠太郎は、野山を歩き回って、美しい草木や花を見つけたり石碑を見つけて写しとったりする作業を始めました。また、古い神社やお



織細な模様を浮き出させる拓本染め

寺、民家を訪ねて、昔から使われている物を見せてもらうこともありました。忠太郎は、ふるさと白石の大地から生まれ育つ美しい自然の物や、ふるさとのかおりのする昔から伝わっている物を探し回ったのです。忠太郎の心の中に芽生えていたのは、昔の物を引き継ぐだけでなく、新しい時代に合った物を作り上げようとする熱意でした。忠太郎の熱意は、「拓本染め」と呼ばれる繊細な模様を浮き出させる技法を見出し、白石和紙を使った美しい「白石紙子」の作品が生み出されました。

白石紙布を復活させただけでなく、ふるさと白石の自然と伝統を生かした美しい白石紙子という工芸を生み出した忠太郎は、昭和四十三（一九六七）年、暮らしぶりは最後まで苦しいものではありませんでしたが、心は大変豊かに満ち足りた生涯を閉じたのでした。

忠太郎の歩んだこの時が、白石紙布調査の最後の機会であり、これが行われなければ、他に例のない白石紙布全体を知る機会も永遠に失われていたといわれています。また、ふるさとのかおりのする、美しく軽やかな感触の白石紙子の工芸品は、現在も全国各地で人々に愛用されています。

佐藤 忠太郎

佐藤 忠太郎は、明治三十四（一九〇一）年、白石に生まれた。伝統であった「白石紙布」について、長い年月をかけて調査を行った。また、拓本染めという技法を見出し、ふるさと白石の自然を生かした「白石紙子」という工芸を起した。白石紙子の作品を求めに、今も各地から愛好者が訪れている。



拓本染めを手がける佐藤忠太郎 (佐藤家提供)

献上：身分の高い人になどに物をさし上げること。

一反：布などの長さを表す。約十二メートル。

需要：商品が必要として求めること。